

Ⅲ-5 [資料] 湯舟坂2号墳出土 装飾付大刀の実測図

新納 泉

湯舟坂2号墳出土の2点の装飾付大刀は、発掘調査の担当者である京都府教育委員会の奥村清一郎氏のご配慮で、当時京都大学大学院の院生であった新納が整理を担当させていただくことになった。発掘調査の現場にも少し参加させていただき、その時点で2点の大刀はすでに取り上げられていたが、出土の様相などは知ることができた。発掘が終わり、資料は京都府庁の一室に運ばれ、そこで接合から実測まで、すべてにかかわることができた。双竜環頭大刀は、環頭部の遺存状態は比較的良かったが、鞘の金銅板は少なからず破損しており、その接合にはかなりの時間を要した。それでも、接合の作業を通じて、さまざまなことを観察し、思いをめぐらすことができたのは、とてもありがたい経験だった。

鞘の装飾のある部分は、佩裏側がやや薄い金銅板で包まれ、佩表側で少し重なるようにして佩表の比較的厚い金銅板を、小さい釘を打ってとめている。佩裏側の金銅板に施された文様は、もともとは竜文が崩れたものだったろうが、もはや竜の面影すら完全になくなっている。タガネで列点を施しており、鞘の木材に文様が残っていたと思うので、鞘の木材に巻き付けたあとで文様を施したのだらう。一方で、佩表には大小の円形の浮文があるので、これは銅板を裏から叩いて打ち出したものと思われる。円形の浮文の並びが少し乱れているので、一個ずつ打ち出したのかもしれないが、どんな台を使ったのかよくわからない。すでに打ち出した浮文を傷めずに次を打つのは、かなり困難のように思う。粘土よりは硬いが粘りのあるものを使用したのだろうか。それとも、ち密な木材にあらかじめ文様を彫っておいたのだろうか、想像は膨らむ。続いて、浮文が完成したところで、鍍金が施される。裏側には少ししか鍍金が及んでいないので、アマルガムを必要な部分に塗ったのだらう。鍍金が終わったところで、佩裏に金銅板が巻かれた鞘に佩表の金銅板が釘で接合される。佩表の金銅板に列点が施されるのは、その後だと思うが、鞘の木材に佩表側の列点の痕跡が残っていたかどうか、記憶がはっきりしない。

この双竜環頭大刀は、たいへん華やかではあるが、強度という点ではきわめて不十分なように思う。刀身と環頭は目釘で直結されていない。鞘の部品は、佩用金具や責金具と筒金具などが接しているだけで何の補強もされていない。何らかの接着剤が使用されていたのかもしれないが、それでも強く振り回せばすぐに不具合が出てくるだろう。もちろん、刀身自体もかなり華奢なものだ。儀式の際などに、ぶついたりしないように気を配りながら使用された姿が目に見えかねない。

このように、詳細な観察でわかってくることは少なくない。ただ、鞘の木材に残る列点文の跡などを、実測図にきちんと表現できていなかったことは残念でならない。もちろん時間の制約もあったのだろうが、細部の注記などをもっときっちりと残すべきであったと、当時の図面をみて反省している。ヨーロッパの考古学研究者は、研究と実測やトレースを分業しており、

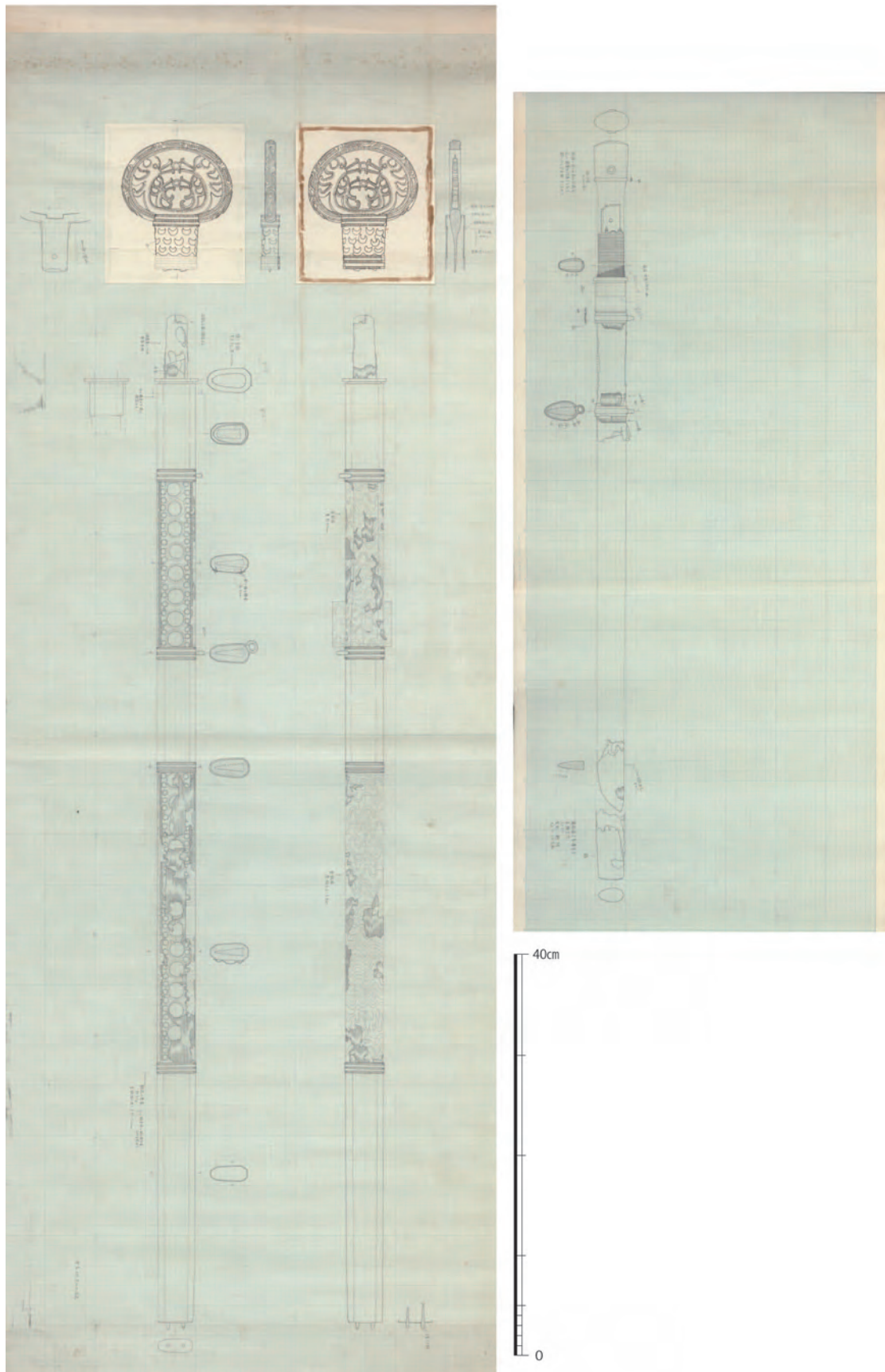


图1 湯舟坂2号墳出土双竜環頭大刀(左)・銀装圭頭大刀(右)実測図(新納泉作成)(S=1/6)

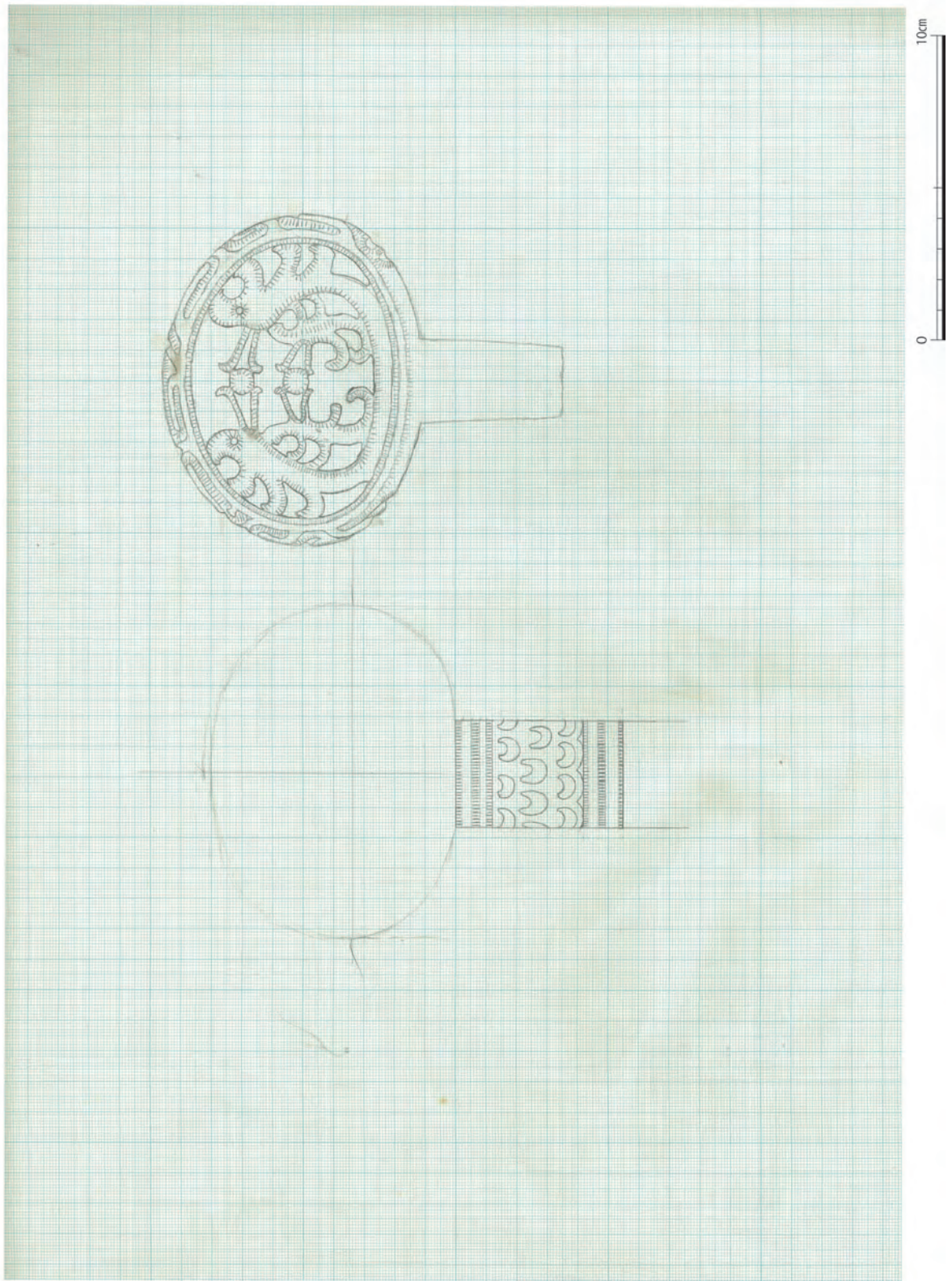


図2 湯舟坂2号墳出土双竜環頭大刀環頭実測図（新納泉作成）（S=1/2）

自分で実測をすることはほとんどないという。それはそれで理論的な研究などに時間を注ぐことができ、メリットがある。それでも、この時期に、遺物の観察に専念できたのは、たいへん幸せだったと思う。担当者の奥村さんには改めてお礼を申し上げたい。

付記

湯舟坂プロジェクトにおいて湯舟坂2号墳発掘時の記憶・記録の掘り起こしは、出土品そのものに対する今日的水準での再調査と両輪をなす重要な課題である。湯舟坂2号墳の遺構原図や遺物原図、写真フィルムの大部分は京都府教育委員会から久美浜町教育委員会を経て、現在、京丹後市教育委員会に保管されているが、一部所在が確認できていないものがある。今回紹介する装飾付大刀の実測図(図1)は、1982年に遺物の保管されていた京都府庁で作成されて以来、作成者である新納泉氏のもとで保管されていたもので、2022年10月15日に京丹後市役所久美浜庁舎において開催された京都府立大学 ACTR 成果報告会「地域資源としての湯舟坂2号墳Ⅱ—出土品研究の最前線—」の基調講演で発掘以来約40年ぶりに久美浜を訪問された際にご持参されたものである(現在は京丹後市教育委員会保管)。双竜環頭大刀の原図は長さ145.8cm、幅53.1cmで、B2サイズの方眼紙を2枚貼り合わせたものである。環頭部分の平面図(表裏両面)のみ、別途トレースしたものをコピーして貼りこんでいる。銀装圭頭大刀の原図は長さ103.4cm、幅37.8cm、B3サイズの方眼紙を2枚貼り合わせたもので、「湯舟坂2号墳出土／圭頭大刀／S=1/1／実測 新納／82・3・29 完成」(／は改行位置)という書き込みがある。

図1の双竜環頭大刀の原図の環頭がコピーだったため、別途作成された環頭の原図が、どこかに保管されている可能性があるのではないかと考え、問い合わせたところ、新納氏の手元にはないとのことであった。そこで京丹後市教育委員会の奥勇介氏に捜索を依頼したところ、京丹後市立丹後古代の里資料館に湯舟坂2号墳の遺構図面ケースの中に長さ53.3cm、幅37.6cm、B3サイズの方眼紙に描かれた環頭の原図が保管されていることが判明した(図2)。注記がないものの、新納氏の作成したもので間違いはない。遺構図面ケースに保管されていたことから、遺物が京都府庁に運び込まれる1981年11月20日までの間、すなわち発掘調査期間中に現地で作成された可能性が最も高いが、確かなところはわからなかった。

いずれも極めて精巧な図面であり、湯舟坂2号墳はもちろん、装飾付大刀研究における学史的な重要性も兼ね備えた貴重な一次資料としての価値があると判断し、京都府立大学文学部歴史学科が所蔵する大型スキャナー(ニューリー社 SCAMERA-1 Plus)でデジタル化した。なおデジタル化は横白彩江氏(京都府立大学大学院)がおこない、原図が長大であったため、分割してスキャンしたものを、Adobe PhotoshopやAdobe Illustratorで調整、合成した。紙幅の関係でここでは全体図は1/6スケール、環頭図は1/2スケールで提示する。(諫早直人)

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

- 編集 諫早直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2